



日本の支援でオルモックに建設された砂防ダムを訪れ、市の職員と現状を確認するパラカンさん(右端)

## 災害に強い国づくりを通して フィリピンの人々を守りたい

日本の技術力を応用して、フィリピンが災害に強い国へと変われるようサポートしたい。JICA フィリピン事務所の現地スタッフ、キャサリン・パラカンさんは、防災分野の取り組みを効果的に進めるべく、日々奮闘している。

### 歴史に残る 大災害を経験

1991年、ルソン島西部のピナツポ火山が大噴火しました。私はこの火山があるパンパンガ州出身です。噴火当時は首都マニラに移り住んでいましたが、約80キロも離れているのに、大量の火山灰が降り積もったのを覚えています。最初はなかなか情報が入ってこなかったため、家で待機するしかありませんでした。

今思うと、私も含め、当時のフィリピンに、防災はほとんど浸透していませんでした。災害が起こったら何をすべきか、どこに避難すべきか、事前に何を準備しておくべきか。そうした身を守る術を学ぶ機会がなく、みんながパニックになってしまったのです。噴火の後は学校で防災について学んだ記憶はありますが、その教訓は、次第に忘れ去られてしまったように思います。

### プロジェクトの成果を 人々に届ける

大学ではマーケティングを学び、海外にかかわる仕事をしたとアジア開発銀行(ADB) フィリピン事務所に就職。2003年には国際協力銀行(JBIC) フィリピン事務所に転職し、秘書として日本人職員をサポートしていました。そして08年

のJBICとJICAの統合により、JICA フィリピン事務所に移り、JICA事業を運営するプログラムオフィサーとして働くことになりました。

これまで特に印象に残っているのは、ネグロス島のバゴ川流域に広がる農地にかんがい施設を整備するプロジェクト。現場を訪れると、私がJICAのスタッフだと知った農家の人が声をかけてくれました。「JICAのおかげで、安心して農業ができるようになったよ。ありがとう」。フィリピン政府の人からそう言われたことはありましたが、実際にかんがい施設を使う人々の「生」の声を聞くことができて感動しました。自分が関わったプロジェクトが誰かの役に立っていると実感できた瞬間でした。

### モノとヒトがそろって 高まる防災の力

今は、防災分野の事業の担当になり、その中に、私の地元であるピナツポ火山周辺の川の護岸整備も含まれています。実は、まだ災害は終わっていません。噴火時の火砕流が山に堆積し、台風などにより雨で川に流れ、周辺地域まで押し寄せています。それを食い止めるため、護岸の補強に取り組んでいるのです。

大変なのは、なかなかスケジュール通りに進まないこと。フィリピンは、政治の国



JICAフィリピン事務所  
プログラムオフィサー  
(防災担当)  
**キャサリン・パラカン**  
Catherine Palanca

大学卒業後、アジア開発銀行(ADB)フィリピン事務所での勤務を経て、2003年に国際協力銀行(JBIC)フィリピン事務所、08年からJICAフィリピン事務所勤務。

といわれます。大統領に決定権があり、関係省庁だけでは手続きが進められません。ですから、フィリピン側担当者に掛け合い、なんとか効果的に事業を進められないかと議論を重ねています。私はピナツポ火山の周辺地域で使われている方言のパンパンガ語を話せることもあり、フィリピン人同士だからこそ、あうんの呼吸で両者をつなぎ、事業の進行をサポートしています。



ピナツポ火山周辺の川での護岸工事を視察

防災は、ハードの整備だけでなく、人々の意識を高めることも大切です。私自身も、まずは自分の家族に災害について知ってもらうことから始めています。子どもたちに東日本大震災についての防災教育ビデオを見せ、「この津波は本物なの？」と驚く彼らに、災害の恐ろしさや防災の重要性を伝えたいです。

日本の防災技術は世界でもトップクラス。フィリピンで災害による犠牲者が一人でも少なくなるよう、これからもJICAの事業を通じてサポートしていきたいと考えています。